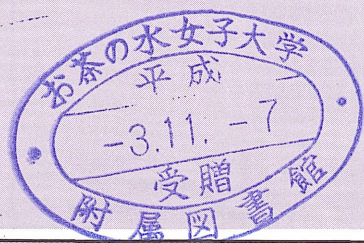


幼児の教育

1991 12



第90巻 第12号 日本幼稚園協会



保育内容 **実践と研修シリーズ**

新しい幼稚園教育要領を実践するにはどうしたらいいか。単なる語句の解釈や解説にとどまらず、教育要領の基本を踏まえた実践例やエピソードを多く例として示しながら、これからの保育の実践の方向を示すシリーズです。保育者養成校の学生はもちろん、現場の先生方にも実践や研修のための懇切な手引き書となります。

こころとからだの育ち

—健康— 近藤充夫／落合 優・編著

子どもが園で安定して活動できる条件と援助の方法をたくさんの例で示します。

B 5 判・208頁・定価1,800円(税込)

保育のなかのかかわり

—人間関係— 森上史朗・編著

今と未来を生きるための人とのかかわりをどう考えどう援助していくか、そのポイントを示します。

B 5 判・208頁・定価1,800円(税込)

自然や社会とのかかわり

—環境— 中沢和子／藤田復生 他・著

園環境の考え方と設定、子どもと自然や社会とのかかわりのあり方をたくさんの具体例を通して示します。

B 5 判・208頁・定価1,800円(税込)

ことばからの育ち

—言葉— 村石昭三・編著

豊かな感性とイメージを培い、自分の言葉を育てる言葉指導のあり方を具体的に示します。

B 5 判・208頁・定価1,800円(税込)

豊かな“表し”に向けて

—表現— 黒川建一・編著

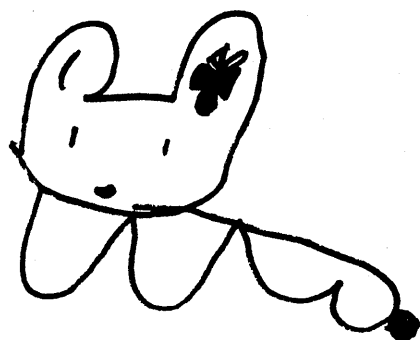
新しい幼児の「表現」とは何か。たくさんの具体例を示して総合的な見方と指導を位置づけています。

B 5 判・208頁・定価1,800円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼 児 の 教 育



第90卷 第12号

幼 児 の 教 育 目 次

—— 第九十卷 第十二号 ——

〈巻頭言〉 子どもと死……………	真行寺 功……………	(4)
保育者の限界と実力……………	津守 真……………	(6)
わが国における現代の母子関係をめぐって……………	山崖 俊子……………	(10)
附属幼稚園の教育(9) 指導計画について……………	村石 京……………	(18)
カレンダーづくりの楽しみ……………	湯沢 朱実……………	(22)
「かたつむり」の中のひとりひとりの子どもたち……………	赤羽美代子……………	(27)
思い出の中の保育(5)……………	守永 英子……………	(32)

© 1991
日本幼稚園協会



ひとりとひとり

一卵性双生児子育て記 4歳〜5歳

須藤 麻江 (36)

園庭より(15) においの記憶

松井 とし (44)

絵本の世界(6) ジョン・バーニンガムの魅力3

高原 典子 (46)

ある日の育児日記から(12)

佐藤 和代 (54)

若いお母さんたちへ 登校拒否と子離れ

庄籠 道子 (55)

第九十巻総目録

(61)

表紙版画・樫村 文夫

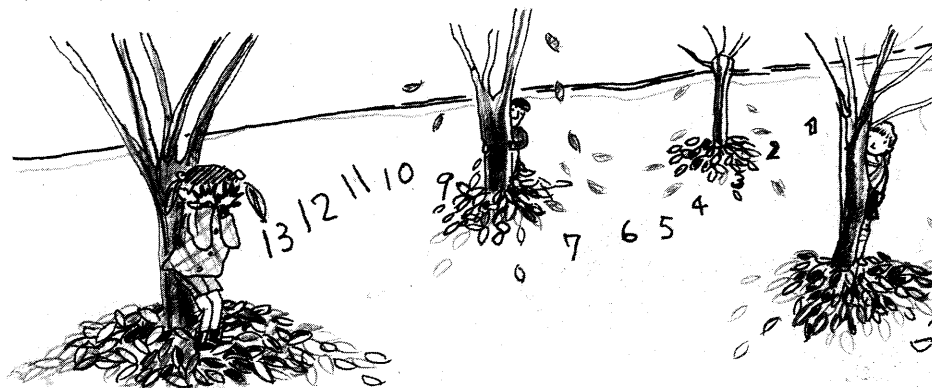
扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／豊田 一秀・吉岡 晶子

編集部・大沢 啓子



子どもと死

真行寺 功

巻頭に「子どもと死」は本誌にそぐわないかも知れない。激しい生の息吹きに満ち溢れた幼い子どもに死はふさわしくないからである。しかし意外にも死は子どもの身近にある。放射能の被爆による白血病や甲状腺がんで死んでいくソビエトの子どもたちや、飢餓と病気に苦しみながら息絶えるアフリカの子どもだけでなく、天災で逃げまどう子どもたちや、戦争後の荒廃した村や町で生きること必死な子らの姿を見るとき、「死の舞踏」の絵がどうしても思いついて不条理な運命を嘆くのは、不穏な現代の世界状況におかれた私の個人的な抑うつ反応だろうか。

「子どもと死」という場合、子どもが病気や事故

で死ぬという、子ども自身の死を意味することもあるし、親や同胞の死ということもある。また友達や死である場合もある。さらに子どもの愛するベットの死ということもある。これまでの調査によると、死を意識し始めるのは小学生の頃がほとんどで、その多くは祖父母の死を契機とし、次いで犬や小鳥などペットの死が端緒となっている。

子どもにおける「死」概念の発達については既に多くの研究がなされているが、なかでもピアジェの発達理論に基づくものが一般的である。それらは子どもにおける「死」概念は成人のそれらと質的に異なるとし、その特徴を幼児期のアニミズムや呪術的思考、人工論といった前論理的思考特性から導き出

している。つまり死を可逆的であると考えたり、擬人化したりして、生死の因果的な関係の把握が不可能であり、結局、子どもは死を理解できないとされる。また、死の恐怖や不安などの情緒の発達についての研究も少なからずなされているが、その主なものは精神分析理論に基づくもので、幼児期においては死の恐怖は愛着対象の喪失やそれからの離別、つまり分離不安を起源とするものである。ピアジェの発達理論に依拠するものも、死そのものに由来するというより「死」の現象とその説明における前論理的ないし前操作期特有の思考に還元する。

いずれにしても、死は子どもへの発達に深く関わっていて、その重要な意味はよく知られている。しかし、なんらかの意味で死に関わる子どもへの教育的指導ということについては余り知られていない。その理由のひとつは死をタブー視して、これを隠蔽し、子どもを死から遠ざけようとする成人の姿勢にある

と思われる。確かに子どもにとって死はふさわしくないが、例えば、致死性疾患に苦しむ子どもの死を克服する過程は、子どもにも人間として死を考える権利があるだけでなく、優れて考えることができるということを経験して、また、親と死別した子どもが喪を経過して、再びに実存的危機を乗り越えて行くのを見ると、モデルとしての大人が死を正常化して、死を子どもの身近なものにすることの重要性を痛感する。

このことは、幼児期に生命の尊さを教えるだけでなく、死を驚き恐れるところを育てることの必要性を示唆している。このようなところが生命への畏敬と人生に対する謙虚さを生むのではなからうか。死への教育が論議されている現在、「子どもと死」についてあらためて考えてみるのも意義があるのではなからうか。

(金沢大学)

保育者の限界と実力

津守 真

この夏のはじめ、ある研究会の席のことであった。八年前に私が保育の実践の場で毎日を過ごすようになってから、私の保育論は変わったかとたずねられた。私はその場で直ちに、この八年間余の実践の中で、考えを変える必要は生じなかったとその方にお答えした。その後、私はこの答え方でよかったのかどうか、あらためて考えた。そして、次のようなことに気が付いた。

*

私の学校は、全体で約三十五人の子どもを、毎年、四、五クラスに編成している。幼稚部、小学部一、二年生、三、四年生、五、六年生と大体年齢順である。どのクラスも二、三人の職員が担任する。私も数年間クラス担任のひとりに加えてもらった。担任をすると、子どもが私を頼りにしてくれることが肌で分かる。毎日のこまかな様子を親に話し、親も家庭で起こったその日のことを話してくれて、生活の様子もよく分かる。親子ともに親しみが増して、



保育の中で私自身が温められてゆくような経験を
した。以前には、同じ子どもと毎日接していてよく飽
きないものだと思ったことがあったが、それだから
こそ面白いのだということも分かった。

その反面、子どもの安全も健康も、自分が守らな
ければ他にはだれも守る人がいないという責任感も
感じる。これは研究者の立場で実践にふれていた時
にはなかった感覚である。また、管理者の立場に
立ったときには、財政や全体のことに向いて、
子どもとの生活に一日中浸ることはできない。その
点、担任をしている時が、いちばん児童研究者にな
れる時である。

ある年、長年手がけた子どもたちが六年生を卒業
し（私の養護学校では、幼児期から小学校卒業まで
十年位を過ごす人が少なくない）、新しい子どもた
ちがいちどきに入学したことがあった。この年とそ
れにつづく一、二年間は、どの職員も自分の担任す
るクラスを守るだけで精一杯だった。私が担任した

クラスも同様で、一瞬の間にいなくなってしまう子
どもや、どうしても外にいきたい子どもなどがい
て、自分のクラスの子ども達から片時も目を離せな
い状態がつづいた。三人の担任がたえずお互いに連
絡し合って動かねばならない具合だった。私は日
頃、学校全体の子どもを、職員全員が見ることを強
調してきたが、その時は、こんなことを言っても空
虚に感じられさえた。どのクラスも同じような状
況だったと思う。皆が必死になって、自分の担当す
る子ども達から目を離ことができなかった。多分、
その時に来られた外来者は、網の目のように注意を
張りめぐらした大人達の緊張感に、異様な感を抱か
れた方があったのではないかと思う。

そういう時には、他のクラスの子どもが部屋に
入ってきて、その子が何をしようと思って来たの
かが目に入らず、邪魔者にししか見えない。まして、
その子が自分のクラスの子どもの遊んでいる物を
取ったり、髪を引っ張ったりしたら、自分のクラス

子どもを守るために、戸をしめて鍵をかけることの必要が本気に論じられたりしたのであった。そして実際そういうことも起こった。

それから数年を経たいまは、あの時どうして皆がそんなに自分のクラスに対して防衛的になったのか不思議に思う程である。当然のことながら、同じ子どもがいまは遙かにおだやかになり、大人との関係も確かになっている。その現在を規準にして考えると、あの頃の大人の行為に対して批判的な眼を向けそうになる。

しかし、あの時に身をおき直して考えてみると、その大変な状況のもとでは、皆が自己防衛的になったのも、無理からぬことだったと思う。それは自己弁護であろうか。もっと本質にもどって考えるべきだったかもしれないのに、そうできなかったところに、私をも含めてそこにかかわった人々の実力の限界があったのだと思う。

事件はそういう時に起こるものである。

ひとりの子どもが弱い子どもをひっかいて傷つけたことが、親の間の問題になり、学校全体を巻きこむことになった。私共は卒業式の前日に、母親全部に集まってもらって懇談会をし、できるだけ率直に話し合った。その内容については省略するが、はじめはその子どもをめぐっての私共の対応の仕方の問題かと思っていた。しかしその後次第に分かってきたことは、それはその子の問題ではなくて、その頃、学校全体がお互いのコミュニケーションを欠いたところに、問題の核心があったのではないかということであつた。親はそういうことに関して敏感である。

春休みに、何日も、職員全員が本気になって、クラス相互の交流をめぐって話し合った。そして、各クラスの部屋に通じるドアの鍵を全部取り除き、子どもも大人もいつでも自由に出入りできるようにした。そのことはただ物理的なことだけでなく、大人達の気持ちが力動的に交流するのを助けた。

一時期、相互のコミュニケーションを欠くに至ったのは、私共の実力の限界によるものだったが、時間が経たなくてもコミュニケーションを回復し、全体が力動的に動くようになったのも、職員の実力によるものだ、と思う。

*

実力とは何か。人には自分の努力では越えられない限界があるが、機会が来た時には、その限界を越えさせる潜在的な力もまたある。おかれた状況の厳しさによってはその力を発揮することができず、自分が掌握できる範囲を守るだけで精一杯になってしまう。心のどこかにそれでは何だか変だと思っていると、そこに破れ目ができる。完璧を求めて過度に自分を防衛していると、自分自身にも進歩がなくなるし、他者の成長に目を向けるゆとりもなくなってしまう。

人の中にあるこのような限界とそれを越えさせる潜在力を自我の力と言ってもよいと思う。それは個

人の成長の過程において育てられる面は大きい、それだけではない。職員同士の関係の中でそれは育てられる。

*

保育は子どもの自我の成長にかかわる仕事であり、保育者は子どもの保育を通して大人になった自分自身の自我の成長の機会に恵まれている。その毎日の保育の具体的なことを職員同士で話し合う時に、それが大人同士の成長の場となる。親との間も同様である。

最初の質問にもどるが、私は実践の場で毎日過ごすようになって、実践を成り立たせている背景の場について、学ぶところが多くあった。保育の実践には厳しい時があるが、その中にあっても、保育者が、子どもの世界の物質のイメージに対する想像力を失ったら、その実践は味気ないものになってしまう。

(愛育養護学校)

わが国における

現代の母子関係をめぐって

山崖 俊子

一、現代の子どもの状況

八月十五日も過ぎた。戦後四十六年を経過した。もはや「戦後」ではないという。時代は変わった。子どもを取り巻く状況の様変わりには激しい。子どもが変わった。我々大人たちは、子どもが見えない、わからないという。さらに若い親たちも何を考えているのかわからないという。

ある高校の社会科学の教師が困惑した表情で次のように語った。

「日本史の授業で、織田信長と豊臣秀吉と徳川家康の

特徴を語る例として、挙げられる句に次の三つがある。

つまり、

『鳴かぬなら殺してしまおうほととぎす』

『鳴かぬなら鳴くまで待とうほととぎす』

『鳴かぬなら鳴かせてみようほととぎす』

そこで生徒たちに、君たちならどれを選ぶのかをたずねた。すると、どれも自分たちの好みではないといい、

『鳴かぬなら鳴くのを買おうほととぎす』

がいいと答えた。このことを一体どう理解したらいいだろう」というものであった。



まさに現代の物質文明の申し子であることを象徴するかの現象である。

また、ごく最近、都心の繁華街の公立中学校に転動になったばかりの教師から、次のような相談を受けた。

「とにかく授業にならないのです。授業中何人もの生徒が、しかも彼らは勉強面ではできる方の子どもたちなのですが、フラ／＼と教室を歩き回り、時には裸踊りまでやってしまうんです。みくまで何かしようと提案しても、そんなことして何になる……ものいうは金だ……などと口走るのです。結局クラスをまとめようと思えば、力で支配せざるをえなくなり、怒られてもちっとも感じないふうなのです。教師って何なのだろうと無力感にとられ、停年を待たずして止めていく仲間がたくさんいます」

この地域は、戦後の急激な土地高騰の影響で狭いところに高層ビルを建て、住居は最上階にあり、父親も特に労働していない家庭が多いという。

これらの話は、いずれも、資本主義社会の経済性優先

の姿を象徴的に表しているといえよう。

これを短絡的に教育の問題と結びつけると次のようになる。それは、今の子どもは耐える力がない、従って、「心の鍛錬」が必要であり、そのためには、スポーツなどを通じて欲求不満耐性を養わなければいけないというものである。

一方、子どもたちは一見、無感動で、怠慢で、無責任で他罰的そのものといった態度を見せながら、実は内的には極めて焦燥感と自信のなさ、そして自責の念に駆られているといった資料がある。

NNSR（日本テレビ・ネットワーク・システム・リサーチ）がまとめた調査、「子どもの生熊系が変わった」（日本テレビ、一九八五年）の中で、小学校三年生から六年生までの子どもの「好きな言葉」についてまとめたものだが、方法としては、子どもの「好きな言葉」を自由記入してもらい、上位三票ずつを集計したという。

その結果は、男子のトップが「努力」続いて「根性」

「勇氣」「必勝」「忍耐」「一番」と続いている。女子の

トップは「友情」であるが、二番目に「努力」そして「希望」「根性」「友だち」「愛」「勇気」と続く。

この結果をみると、恐らく誰しもが子どもたちの「けなげさ」に驚くに違いない。けなげというより。絶えず他者との間の競争に駆り立てられ、勝てない原因を自身での努力の足りなさに求め、自信をなくしている。内面は不安の渦で一杯である。

大人たちの集まりで私は次のことを質問する。「みなさんが子どもの頃と今の子どもたちとを比較して、どちらが幸せだと思いますか」と。

この質問に対して例外なく、「自分たちの子どもの方が幸せだった」と答える。もちろん幼い日のノスタルジーということも考慮に入れるべきではあろうが、それにしてもである。

直観的に今の子どもたちを取り巻く経済的豊かさと同じ時に、拭い去ることのできない不安感を感じ取っているからに違いない。

思春期における「登校拒否」の激増ぶりも不安を感じ

る一因となつていよう。その他、神経性食欲不振症。過食症を中心とした摂食障害、対人恐怖症、強迫神経症を中心とした神経症、分裂病、境界例など数量的にも増加し、また表れ方も時代と共に変化してきているといわれる。

子どもを取り巻く、このような状況の背景を探り、可能な対応の方法を検討したいと思う。

二、母子の関係を規定するもの

子どもの問題が語られるとき、決まって取り沙汰されるのが、「母親批判」である。「母原病」は古くて新しい言葉であり、最近では「母親は首に巻きつく蛇」などという言葉まで登場した。

確かに、子どもの育ちにとって母親の影響が大であることは、ボルビーに逆のぼるまでもない。しかしながら、それほど単純な因果関係で語れるほど母子の関係は簡単ではない。

(1) 子どもの側の要因

私たちは日常の臨床経験の中でよく経験することなのだが、「この子は小さいときから何となく気になる子どもでした」とか、「とても育てにくかった子どもです」という話を耳にする。もちろん、子どもに心配を感じているときは、過去のことをアレコレと悲観的に思い起こすものではある。

その点は十分に配慮した上で、登校拒否の母子関係について、その関係性を規定する重要な因子として、乳幼児期の子どもの中にある「育てにくさ」と「育てやすさ」に着目し、分析（注①）を行った。

その結果、登校拒否児の母親の方が、コントロール群の母親に比べて、「乳幼児期の子育てについて他のきょうだいより手がかかった」という印象をもっている者が圧倒的に多かった。

その内容については、①食べなくて困った ②虫や音などをひどく怖がった ③泣くことが多くて困った ④母親から離れなくて困った というものであり、登校拒

否児の母親は、幼少期よりわが子に対して何となく気になりながら子育てをしていたという。

これに対して、コントロール群の母親で、子育てに手がかかったと感じているものは、その内容について明らかに違いがあり、①動きが激しくて手をやいた ②手を洗う習慣をつけるのに手をやいた というものである。

この比較調査は母親の主観によるものであり、従って、この結果から直ちに、子どもの乳幼児期の客観的状況を推測することはできない。

しかしながら、この調査はただ単に登校拒否群とコントロール群を比較したものではなく、それぞれきょうだいをもっている者だけを取り出し、他のきょうだいとの比較の中で感じた子育ての印象について、両群間の比較を行ったものであることから、登校拒否群の母親が自分の子どもに対して、その乳幼児期に子育てに手をやいたという印象はないが、何となく気になった、何となく不安だったという印象をもちながら子育てをしてきたことは確かである。しかも、気になったり、不安になった原

因が、子どもの食の細さ、虫や音への恐怖感、泣くことの多さ、母親からの分離のできなさなどで、いずれも、他のきょうだいには感じられない「神経の過敏さ」や「不安の強い」傾向を、すでに二、三歳の時期にもっていたことがうかがわれ、そのことが、その後の母と子の関係に影響を与えていることは容易に推測される。

(2) 母親の側の要因

子どもに与える母親の影響を考えると、固定的な性格分析を母親に対して行い、短絡的に子どもの行動と結びつけて語られることが多い。

もちろん、それは重要な意味をもってはいるが、子どもにとって大切なのは、客観的事実というよりも、むしろ、各々の子どもが受けとめる母親像である。あえて極端にいうならば、客観的母親像が例えどうであろうとも、各々の子どもが、母親を肯定し、受容できていれば、そして、子どもが自分自身を肯定し、受容できれば、その関係は問題ではない。

しかも、母親を肯定し、受容に至る過程は紆余曲折があつて、何度かの変転をみなければならぬ。従つて、どの時点で「関係」をとらえるべきか、余程慎重でなければならぬ。

さらに、母子関係の中でも、従来から強調されている乳幼児期を中心とした濃密な母子接触の重要性についても、もちろん、異を唱えるものではないが、ポールビィに始まって、ともすると、その形で因果関係を語ろうとする者は未だ少なくない。この点についても新たな検討を加えたい。

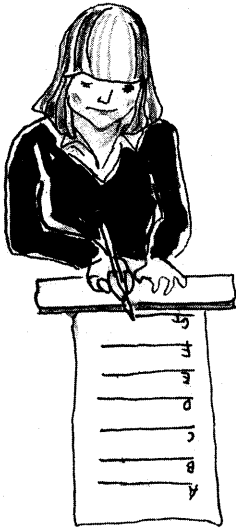
共働き家庭が年々増加しているというのに保育所保育を「できれば避けた方がよい」「背に腹は代えられぬ」と否定的にとらえる専門家も少なくない。

とくに我が国の理想的母親像は、自己犠牲的に子どもの側に立つ姿である。

従つて、日本の保育界の大半を支えるのは、女性保育者であるから、彼女らは、我が子を理想的に育てたいという期待と、保育の専門家として良い仕事をしたいとい

う期待とは、相容れない結果となる。自己矛盾を抱えて生きるということは、母子関係に少なからぬ影響を与えるはずである。

小学校二年の登校拒否児を抱えた、母親F子は、専業主婦であるにもかかわらず、自分が「子どもを可愛いと



思い、子どものために全エネルギーを注いでこなかった」と、「子どもに申し訳ないことをした」と厳しく自己批判を繰り返し、そんな自分をどうしても肯定的に受け容れられず、一年以上も抑うつ状態が続いている。

「子ども好きでなくてはならない」「よくつき合っていないといけない」というのが、我が国の母親をしるる強力な掟となっている。

これらのことは筆者にとっても極めて大きな不安であり、単なる思い込みに過ぎないのか、あるいは、どの部分が重要な鍵なのか切実に知りたいと思った。

以上のことを念頭において、子どもが母親を肯定し、受容を可能とするために、欠くべからざる条件は何なのか、を知る手がかりとして、現代の女子学生（高校生、短大生、女子大学学生、共学大学学生）の就労や社会参加、子どもを持ったときの子育ての姿勢と自己実現のしかたなどについて、娘が母親の生き方をどのように評価するか、との関係でとらえようとした。（注②、注③）
その際、女子学生のみ調査対象としたのは、母親と同性

である女子学生が、自分自身の将来をイメージするとき、母親をどう評価するかは避けて通れない課題である。従って、母子の関係をとらえるには、まず女子について検討することが有効であると考えた。

その結果、母親の生き方を娘が肯定し、受容するための鍵は、母親の生き方の形態ではなく、姿勢であることがわかった。つまり、母親自身が矛盾を感じることなく、「生き生き」と生きている。その姿勢が極めて重要であるというものである。

三、今後の課題

今年度上半期の話題ナンバーは何と言っても、「出生率低下」つまり一人の女性が生涯に産する子どもの数の平均が一・五三人となったというニュースである。

その原因についてはさまざまに分析されているが、筆者は次のことが大きな問題であると感じている。

前述したように、今の時代、子育てが、いや人が生きることが極めてむづかしくなっている。

ところがその責任は圧倒的なウェイトで母親の側に傾いている。単身赴任を例にとってみても、今や特別な現象でなくなってきた。母親の子育ての責任は重い。

また結婚年齢が高くなっているが、高齢出産は障害児出産の比率が高いといわれる。

障害児をもったときの母親の責任の重さは他と比較できないほどである。

筆者はこの夏、典型的な日本の農家で何日か過ごした。そこでは、土間に続く居間に、いろいろこそ今はなくなったが、村の長老格を囲んで村人が朝から何人も入れ替わり、立ち替わり訪れ、食事時には、居合わせた人はみな一緒に食事をし、風呂をもらいにくる人もいる。こうして、お互いが協力し合わないと、農家はやっていけないわけだが、都会の生活に慣れた、いわゆる近代的自我の持ち主は「プライバシー」をめぐる、葛藤を生じる。

ところが一方で、孤立感、孤独感はない。従って、子どももみんな育てている感じ、例え、障害のある子ども

ものであっても、それはそれとして「お互い様」の関係である。筆者はこの状況を「たし算の文化」と名づけた。各々が各々として生きながら、各々、たし算したところで集団として力が発揮できればいいという印象である。

一方、都市部の生活に戻ると、その違いが極めて明瞭となった。つまり、集団がないわけだから、各々のところで自己完結していなければならない。親も子も、各々、力量の違い、個性の違いがある。にもかかわらず、各々が同じ程度まで肩を並べなければ生きていけないのであり、それを孤軍奮闘で母親一人頑張って達成しなければ支えてくれる人などいない。

母親の肩に重くのしかかる、責任の重たさは、「子どもを好き嫌い」などといっていられるほど軽いものではない。

その上に、日本の母親の理想像に対する過大な期待が重なって、日本のこれからの女性は益々、子産み、子育てに抵抗を示さざるをえない。「一・五三人」はそうした女性の気持ちの表れといえよう。

だからこそ、まさに今こそ、子育てをもっと自然な、

当たり前の営みとして楽しめるために、さまざまな偏見、とらわれから解き放たれることが必要であり、今回そのための実証をわずかではあるが成し遂げることができた。更にこの作業を続けていきたいと思っている。

△注△

①山崖俊子他「登校拒否児の乳幼児期における親子関係」――

「育てにくさ」と「育てやすさ」について――『小児の精神と神経 Vol. 30』国際医書出版 一九九〇

②山崖俊子他「母親の生き方が子どもの生育におよぼす影響についての基礎研究 その2」日本保育学会第43回大会研究

論文集

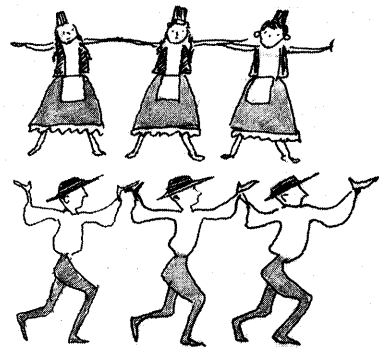
③山崖俊子他「母親の生き方が子どもの生育におよぼす影響についての基礎研究 その3」日本保育学会第44回大会研究

論文集

(津田塾大学)

附属幼稚園の教育(9) 指導計画について

村石 京



幼稚園の参観に見えられた先生方からよく質問されることに、「自由保育を行っている場合、指導計画や日案はどのようにしているのでしょうか」ということがあります。この項では、附属幼稚園の教育はその中心が子どもの生活であり、教師は子どもが主体的に生活出来るように環境設定を行い、子どもの生活を支えていくという日常の中にあつて、教育課程や指導計画はどのような位置づけを持っているかについて、少し考えていきたいと思います。幼稚

園の教育目的は「幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長すること」と学校教育法に定められています。ですから、子どもたちをよりよく伸ばし、教育する場として、夫々の園にはその園としての教育の理念があり、これが柱となつて、夫々の年齢やその時期にふさわしい教育課程を持ち、指導計画を組み立てています。附属幼稚園においても、平成二年度には新教育要領の内容をふまえた教育課程を作成しました。これは園で日頃実践し

している保育を系統だてて考え、より深めていくことを目的としたものであり、三歳・四歳・五歳の各年齢毎に一学期・二学期・三学期として構成したものです（教育課程については平成二年十月号に記載してあります）。そしてこの教育課程は、附属幼稚園の教育の基本となり、土台となる考えを現したものであり、指導の方針を表したものです。

そしてこの教育課程に沿った保育を行いながら、実際の子どもの姿はどのようなであり、どのように遊び、どのような活動が行われているか、教師はどのようににかかわっているかといった実践の保育の記録をとり、まとめていくという研究を引き続き行ってきました。一年次は子どもの遊びに視点をあて、各組の幼児全員が一日の中で行っている遊びについての記録をとりました。それによって私も、予想していた以上に子どもたちの遊びをつくっていく力の大きさを知り、その種類の多さを知り、子どもたちが日々の生活の中で自分から遊びを見つけたら、

考えたりしていることを知りました。そして二年次の現在は、環境とのかかわりに視点をあてながら、子どもたちがどのように幼稚園の環境にかかわりながら遊びを進めていくかについての記録をとる作業を進めている段階です。

このような保育の記録をおこす原点となっているのは、教育課程を軸としての幼児教育についての教職員の共通理解とその実践によるものなのですが、これを実際に普段の保育の中で進めていくには、やはり指導計画というものが必要となってきました。担任として級の子どもの中に教育課程をおろしていくには、綿密な指導計画を持たなければなりません。子どもを主体とした保育の中では教育課程や指導計画は要らないといった極端な論もあります。私は幼児教育を行っていく上で、教育課程や指導計画は必要であったり、軽視されるようなものではないと思います。むしろ一人ひとりの子どもを大切に思い、充分にその子どもに沿いながら伸ばし

ていきたいと考えるなら、しっかりとした幼児理解と保育理念を持ち、きちんとした指導計画を組み立てていかなければならないと思います。大切な毎日の保育を、思いつきや場あたりのなもので行うことがあってはならないと考えております。

一人ひとりの保育者が保育を行うにあたっては、その基本となるものを充分押さえ、綿密な教育計画を持った上で臨むことが大切です。その上で、実際の子どもを見ていきながら、何かそこに差を感じたり、あるいは子どもの考えたことに意義を見つけた場合（これが最も多いのですが）は、教師の予定や計画を先行するのではなく、子どもに合わせながら保育を進めていくようにしたいものです。基本的なものを充分組みたてた上で子どもに合わせ、子どもの思いを充たし、子どもを中心とした保育をする、これは保育をする者としてのゆとりと、臨機応変の対応といえるものだと思います。日常の保育の中で、子どもと教師の比重を見れば子どもの方がずっ

と重いのですが、それだからといって教師は何も持たずに保育に臨むとか、ただ子どもの好きにまかせるといった無謀なことをしたり、子どもに流されたりする日常であってはしっかりとした保育やよい指導は成り立たないと思います。子どもをよく見、よく知って子どもに合わせていくことが最も大切でありながら、その源には教師としての充分な子どもに対する理解と愛情を持ち、そして現場における教育方針や教育計画などを持っていることが肝要となると思います。

次に附属幼稚園においての指導計画などは、実際にどのように進められているかについて少しふれてみたいと思います。日常的には担任に指導案の提出を求めたりはせずに、夫々の担任は自分の思うように学級の運営を計画し、自分の考えに沿って保育を行っております。しかし保育についての基本方針や共通理解が持てるように、遊びの進め方や子どもたちについての話し合いは、出来るだけ多く行うよう

にしています。それからその年度の教育計画としては、年間の予定、学期毎の予定、月の予定などは詳しく打ち合わせ、検討するようにしています。また年間の研究計画や進め方なども、全体で討議するようにしています。更に週の予定、流れ、実践計画、留意事項等に関しては、同年齢の組毎に事前に細かく打ち合わせをしたり、それが園全体へかかわりのある内容であれば、職員全員で相談し、検討していくようにしています。

一日の保育の流れ、予想される遊び、その日の予定等は保育者が級の子どもの状況を見ながら組み立てるようにしています。実際にその日何を行うかは、組の中で子どもと教師が一体となつてつくり出していくわけですが、保育者としては何を教育目標とし、ねらいとして保育を進めていくかは充分考えていかなければなりません。附属幼稚園では毎年前期と後期の二期にわたつて教育実習が行われますが、一日の保育の流れや、何に留意していくか等を

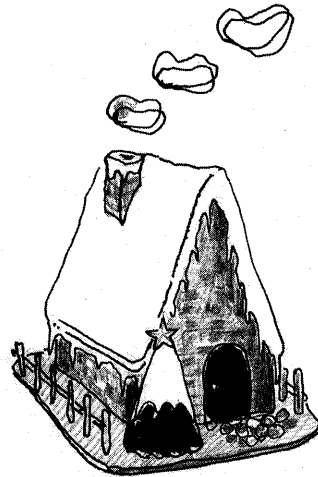
理解する上で、保育案（日案）の作成指導が、指導教官として実習生に対する指導の一つにもなっています。日々の保育の中で何を目的とし、何に配慮すべきかを細かく考えていかなければ、よい保育は成り立っていかないことは今更いうまでもないでしょう。

保育者は子どもをよく見、子どもの求めていることを知り、適切な子どもとのかかわりを持つことが大切であり、子どもの思いが実現出来るように援助したり、支えていくこと、これが子どもに合わせた指導というのだと思います。こうした指導を進めていく上にも、土台となる指導計画を充分にもちながら、その状況によって適宜変化させていくような保育者としての柔軟な姿勢があつてこそ、子どもを大切にしたいよりよい保育が行われていくといえるのだと思います。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

カレンダーづくりの楽しみ

湯沢 朱実



今年で八年目になる「ぬいぐるみカレンダー」づくりも、はじめは二年だけのつもりでした。

一九八四年、東京子ども図書館は十周年を迎え、基金を増やすためのキャンペーンをしていました。長い間、東京子ども図書館の支援グループとして活動してきた「手づくりはたのし工房」は、例年のバザー以外に、もっと大勢の方に協力していただく方法はないかと、知恵をしぼっていました。私は工房の一員として、ぬいぐるみを作っていたのですが、その人形達が毎年バザーで売られてしまうのを残念がった夫が、写真に撮りはじめ、

それがだいたい溜っていました。その写真を基にできたのが一九八五年の第一作「こうさぎカレンダー」でした。

一八センチ×一三センチの小さなカレンダーは、どこにかけても邪魔にならず、送るにも簡単なことから好評で、資金集めの目的も果たして、大きな満足感を味わいました。

私にとって初めての印刷物が人の手に渡っていくと、買って下さった方から、「タンポポの三月が好きです」とか「キノコの傘をさしている六月がいい」とか「来年はどんな動物ですか」等、さまざまな好意的なご意見を



▲ タヌキの一家

いただきました。見ず知らずの方からのこのような働きかけは、新鮮な驚きでもあったのです。

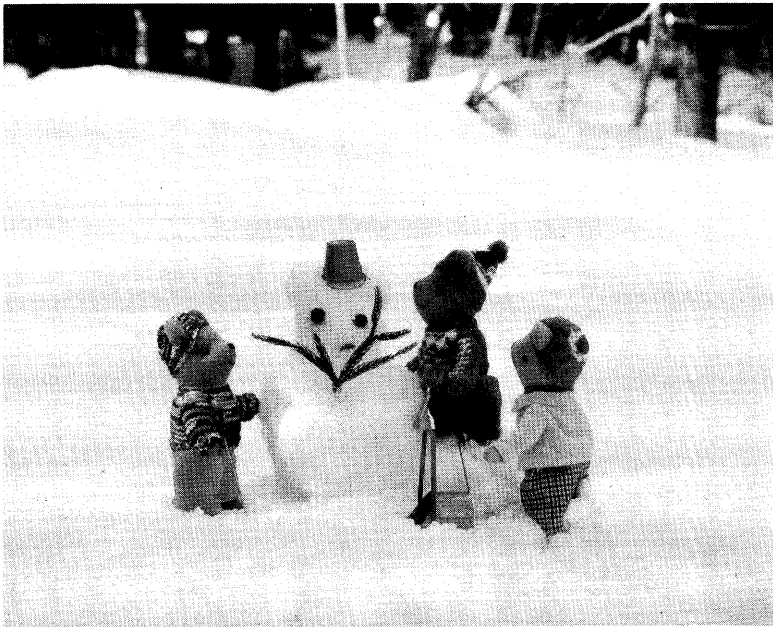
一年限りのつもりでいた私達が、周囲の人達の励ましで次をどうするか迷っていた時、街でログハウスのミニチュアセットを見つけました。ねずみにぴったりと購入したのが春休み直前、それから一週間、夫と二人の共同作業で高さ五〇センチの家ができました。早速、夫の勤務先のお茶の水女子大学に運び、構内のあちこちに家を置いて撮影です。まだ春休みで人気のない構内は、タンポポの咲く広場、花ダイコンのうす紫にうまった片隅、白い二りん草のかわいい姿、どこに置いても絵になるような気がして、一日で三か月分も写したでしょうか。なにしろ身の丈一五センチほどのねずみサイズですから、一メートル四方もあればたりるのです。幸か不幸か今のお茶大には人手の届かない所がたくさんあって、私達には宝庫なのです。

それからは、どこへ旅に出るにも二、四匹をつれて歩くことになり、夫の学会で行ったニューヨークでは、エ

ンパイアステートビルの上で写しました。このお上りさんねずみは残念ながら没になりましたが、その時求めた小さなヨットは日本の湖で短い航海をしました。

“どこへ行くにも”といっても、子ども達が大きくなってしまった我々は、そうあちこちへ行くことはありません。カレンダーづくりをする時の私の唯一の要求は、一か月一枚のカレンダーにしたいということでした。素人の手づくり人形を見ていただくには、せめて季節感をお届けしたいと思ったのです。それにはもったどこかへ、それぞれの季節に行かなければなりません。こうして思いがけず夫婦二人で、ぬいぐるみをつれての旅がはじまりました。あんずの花咲く信州の里、早春の高山地、何十種という桜を集めた高尾の林業試験場、雪のために越後中里のスキー場、一面に花咲くレンゲを求めて川越の畑へ、日本の四季は美しいと見直しました。季節とは関係なく、人形の大きさに合った場所もあります。何度目かの海外旅行でオランダに行った時には、世界的に有名なミニチュアタウン、マドローダムで写し

◀ 雪の中で



たいと考えました。その年はたぬきでしたが、親たぬきは大きすぎて1/20のマドローダムには合いません。

そこで身長一六センチの子たぬきに大人の服を着せて、変身させました。他にうさぎは身長一二センチの特別サイズをつくり、ツアーの観光中に撮影しました。来
年一九九二年のくまの五月と九月は、大阪の花の万博で
写したものです。

ところで、外で写していると人の反応もさまざまです。外国ですと、まず子ども達が、寄ってきます。もちろん言葉は通じないのですが、とにかくそばまで来てあれこれ言い、人形を手にとってはおずりしたり、小道具に感嘆の声をあげるのです。親がとんできて交通整理？をしてくれるほどです。ところが日本では、通りがかりにちらちら横目で見て、仲間同士でヒソヒソ話すだけ、私達に直接話しかけることはありません。日本で話しかけて下さるのは、きまってお年寄りです。それも女性の方が積極的なのです。見知らぬ人に気楽に話すことが、その人達の自由度のバロメーターのように思えるのです

が、日本では子どもよりお年寄りの方がずっと自由だということでしょうか。

うさぎ、ねずみ、くまと三年たった時、できれば十年続けようと決めました。思えばその頃はまだ老眼鏡の世話にならずに、手仕事ができたのです。八年目の今では、制作担当の私が要老眼鏡なら、カメラ担当の夫も同じで、一日で三か月分のペースは少々きつくなりました。

しかし、八年間のカレンダーのためのアルバムを広げると、夫が出張先の広島でアンティークのミシンを支入れてきた時の私の驚きと夫の得意顔、ねずみの教室風景撮影中に、後ろを向いているおしゃべりねずみに注意をする夫の職業意識に大笑いしたこと、撮影直後にイカダから水中に転落したくまの救助騒動等々、子育て後の楽しい思い出の多くが、カレンダーづくりと共にあることがわかります。

花の情報を寄せて下さった卒業生や、次の機会にどうぞと小さな道具類を届けて下さる方、そして何よりも毎

年カレンダーを買って下さる大勢の方々のおかげで、私達夫婦二人のボランティアも実りあるものになってきました。

十年まではあと二年、どうやらそこまでは行きつけそ

うですが、好きなことをしてお役に立つかぎりいつまでもやりたい気持ちと、老害にならないうちにやめねば、という気持ちの間にゆれているのが現在の心境です。

(東京都大田高等保育学院講師・ポケット文庫主宰)



▲ 雪の中のくまの親子

「かたつむり」の中の ひとり ひとりの 子どもたち

赤羽美代子



R園の、保育場面の様子を、ちょこりと書き留めた、「かたつむり」(家庭に出すお便り)の中から、ひとり、ひとりの、子どもたちの様子を、記してみましよう。

五月号 三歳児 女児 A子について

ふっくりとしたA子は、三歳児C夫に、い

きなり、ピチャリと叩かれます(C夫は、表現がへたな子で、お気に入りを見ると、挨拶代わりに、突然、叩きます)。

A子はC夫に脅えて、落ち着きません。

或る朝、A子は長髪をバサリと切る。自慢の広がるスカートが、短パン姿に変わる。黒のTシャツ姿もありしく、颯爽と園の玄関に

立ちました。私は「A子の御両親は、三人めの女兒を男装の麗人として、遅しく育てるのかな？」（この発想は、『ベルバラ』の影響でしょうか？）と、思いきや。A子が、研究したスタイルとの事。A子は「今日、C夫は、私をぶたなかつたよ。成功！ 成功！」

オスカル様、ステーカー。アンドレより

六月号 四歳児 女兒 B子について

B子の母が出産のため、入院をしました。

ひとり娘のB子は、毎日が淋しいのです。

ある日のB子、「私は、赤ちゃんが生まれそうなの。今からママの病院に入院します」と半べそで、訴えます。教師は「ハイ、急いで、入院の仕度を致しましょう」と、B子の身体を、ぎゅっと抱きしめました。

六月号 五歳児 男児 Y介・M志について 年長組の避難訓練の日です。

教師の「地震ですよ！」の声に、子どもたちは、礼拝堂の長椅子の下に潜ります。

M志は、ことばの出が遅い子です。「地震！」の合図に、キョロ、キョロと不安です。

教師が、M志に手を貸す前に、四、五名の友だちが、バラバラとM志めがけて駆け寄り、小さな手、手のひらで、M志の背中を押し、引っぱり、長椅子の下に潜り込みます——中略——。

M志は、友だちとの遊びはにが手ですが、今、皆の下敷きになり、頬がよじれても、ニコニコ顔で、皆に守られています。

Y介は優しく、立派な子です。M志が皆と避難をした姿を確かめると、急ぎ、他の椅子の下に入り、M志を見守ります。

Y介は、日頃、M志の遠く、近くに有り、優しい遊び手、導き手となり、M志に尊敬されています。園児も、教師も感動する心が、「地震」の様に揺れるのです。

七月号 五歳児 男児 G太について

時どき、子どもたちは、アーク広場を散歩します。広場から、教会の塔の十字架が、ビルとビルの間から見えます。「十字架が見える!」「十字架だよ!」と、大喜びです。

突然、G太が「先生、イエス様って、すごい人気があるんだねー」と感動の声をはり上げ、十字架を見つめています。

子どもたち、教師も、ビルの中の十字架を見上げると、いつも歌が出てくるのです。

♪煉瓦の 幼稚園の 十字架の塔を

アークの広場で 見つけた散歩♪

(雪山讃歌の曲で唄います)

十一月号 四歳児 男児 T雄について

H子は、クスクスと笑い「アーメン、ソーメン、ヒヤソーメン」と、お祈りをしました。W先生は「イエス様が、二千年も前の、昔に教えて下さった。おことばです。アーメンだけでいいのよ」と、皆に話されました。

やがて、T雄が駆けてきて「先生、イエス様が二千年も前の昔に、言ったばかりなのに、Hは、もう忘れて、アーメン、ソーメン、ヒヤソーメンと言いましたよ」私「アラー」T雄「たった、二千年前の、昔なのに、もう、忘れるなんて、オカシーヨーネー」と、両目はパッチリ、口をとがらし、首を曲げて、力強く、私に訴えます。私も、

T雄と一緒に、首が曲がってしまいました。

十二月号 五歳児 男児 H彦について

H彦は「ママお願い！ ダビデの村に、赤ちゃんイエスを、おがみに行こうよ」と。

このH彦の希望が、全園児の「願い」にもなりました。サンタさんに「願い」を聞いて欲しいと、歌をつくりました。

○2番
(1番は略します)

♪サンタのおじいさん私の願ワタシい　ダビデの村
の馬小屋で　メエーメエー羊ヒツジと優しい天使
と、赤ちゃんイエス様　おがみたい♪

クリスマスの日、サンタさんは、子どもたちの、可愛い「願い」の歌を聞き、大きく頷き、大きな手帳に、書き込んでくれました。

(結んで開いての曲で、唄って下さい)

十二月号 五歳児 女児 O子について

「かたつむり」 リュー・ユイ

♪ かたつむり おかしいな 目玉が一つの
上にある おかしくない おかしくない
目玉が上なら よく見える♪

♪ かたつむり おかしいな おうちをしょっ
て あるいてる おかしくない おかしく
ない 敵にあつたら もぐりこむ♪

♪ かたつむり おかしいな おなが そっ
くり足になる おかしくない おかしくな

い 足が大きけりゃ あんぜんだ♪

♪ かたつむり のろいなあ うごかないのと
おんなじだ のろくたつた のろくた
て 止まらなけりゃ いいんだ♪

十二月の園児は、お互いの違いを認め合
い、共に生かし合いつつ、止まらずに、成長
を続ける子どもたちとも言えましょう。

(霊南坂幼稚園)

思い出の中の保育(5)

守永 英子



思い出の保育の中では、当然のことながら、子どもは、いつも、幼児時代そのままのエプロン姿で登場してくる。N子も、おそらくは、もう子どもを持つ母親になっていることであろうが、私の思い出の中では、今でも、お下げ髪のかわいらしい女の子である。

N子が園児であった頃は、世の中が、まだ今のように豊かな時代ではなかったせいか、おべんとうも、菓子パンと牛乳を持つてくる子どもが時々あった。また、たまに、おべんとうを忘れてくる子どもがあると、菓子パンと牛乳を買って、間に合わせた。そのようなある日、三歳児クラスのN子が、おべんとうを忘れてきた。家から届けてもらうには時間がないので、電話で連絡だけしておき、菓子パンと牛乳を買ってきて間に合わせた。

帰る時刻、早めに迎えにきたN子の母親が、「先生、ちょっと……」と、礼を言いながら、事情を話してきた。聞くところによると、母親が朝作ったおべんとうを、持っていきたがらず、「パンと牛乳にしてほしい」と言いはるので、おべんとうを持たせなかったということであった。母親としては、子どものわがままを、少し懲らしめたいという気持ちがあったようである。

“それにしても、おべんとうを持たせないとは……”と、少し、こだわりを感じながらも、私は、N子に、言いきかせを試みた。“お母さんは、N子が丈夫で、大きくなるようにと、一生懸命おべんとうを作ってくださること”“パンだけより、いろいろなものが入っているおべんとうの方が、体のためにいいこと”

N子は黙っていた。大人が、自分の正当性を押しつけようとするとき、しばしば、子どもは防御の姿勢をとる。思いがけない強い抵抗にあうと、大人は、引っこみがつかなくなり、何がなんでも、大人の主張を子どもにも認めさせようとすることになる。私は、このような状況に、お互いを追い込むことを好まない。

私は、気分を軽くして、つけ加えた。「私はそう思うけど、N子ちゃんは、どう思う?」N子の表情がやわらぎ、相手を受け入れるゆとりが生まれたようであった。

後日、母親から受けた報告によると、N子は、「N子ちゃんは、どう思う?」と聞かれたことが気に入らしく、家でも「どう思う?」を連発、家中で、はやってしまったそ

うである。子どもの心の、大事な一面にふれたような気がして、心に残る出来事となった。

Y子のエピソードも、私には、ほほえましく思い出される。

大きい組になると、子どもたちは、手近な材料を自由に使って、いろいろなものを作って楽しむようになる。保育室には、子どもたちが、自由に使えるように、マジック、ホチキス、セロハンテープ、色紙、画用紙など、材料や用具が、棚においてあるが、必要に応じて、別の戸棚から出してあげるものもある。

Y子が、何を作るのか、私のところにきて「ねえ、赤いやつ、ちようだい」と言う。

「えっ、赤いやつ?……」ちよつと考えて、すぐに思い当たった。その頃、子どもたちは、透明なセロハンを時どき、使いたがっていたが、まだ、自由に使えるようには、棚に出していなかった。「セロハンのこと? あれ、セロハンて言うのよ。やつ。」って言わない方がいいと思うわ」

Y子は、きょんとんとして「なぜ?」と聞く。Y子は三年保育の子ともで、生まれが遅いがしっかりしていて、きつかった。最近、穏やかで、表情もかわいらしくなっている。丸い眼で見あげ、「なぜ?」と聞く表情に、私も、にっこりして、「だって、Y子ちゃんはおじょうさんだから……」という、Y子は、得心が行ったようであった。

Y子は、そのあと、たびたび観察にきていて親しくなっているF先生のところに行き、



「赤いや、ちようだい」って言って」と、求め、F先生が、その通りに言うと、「や、つ」って言わない方がいいよ。女だから」と言って、にこっとしたという。そのときのY子の心理は興味深いものがあり、私には、ほほえましい思い出となった。

大人と子どもが、教えるものと、教えられるべきものという固まった関係でなく、それぞれに、感じたり、考えたりするゆとりのある関係がつくられていくとき、子どもは、その心の内を、かい間みせてくれる。こちらの働きかけを受け入れてくれるのも、そのようなときである。

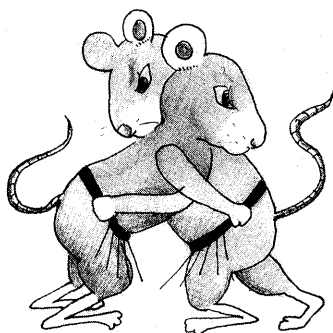
(元お茶の水女子大学附属幼稚園)

ひとりとひとり

～一卵性双生児子育て記～

4歳～5歳

須藤 麻江



竜平と訓平のふたりが幼稚園に入る直前に、私の両親と同居することが決まり、バタバタと調布から世田谷の実家に引っ越すことになりました。入園を決めていた幼稚園をキャンセルし、あまり深く考えることもなく、私がでた幼稚園に入園手続きをすませました。

幼稚園は、年少から年長まで全園児あわせて五十人ほどの小さい園です。若く明るい先生達は、きれいな色のさっぱりした服装でてきぱきと動き、園長先生は今の傾向である、給食、通園バス、延長保育に反対の姿勢を貫いていらっしゃいます。その方針は、私が在園していたときと少しも変わっていません。私は、園長先生の頑固

さに好感をもちました。

子どもたちは、以前の団地のように安全な空間もないし、友達もいない所に越してきたかと思ったら、その数週間後には全く知らない子どもや、大人の中にぼんと放りこまれた訳です。お気の毒というより他ありません。

「入園しました」というと聞こえはよいのですが、実際は「ぶちこんだ」といった方がよいかもしれませんが。双子なんだから、「ふたりの世界でしあわせ」もよいけれど、よその子たちにゆさぶられることも大事と考え、親は勝手に子どもたちを幼稚園にぶちこんでしまったのです。案の定、はじめの半年は親も子も大変でした。そう、先生も、です。

幼稚園でのふたり

●四歳一か月

もう！ 竜平、訓平、何でお家に帰ろうとしたの。園長先生びっくりしてしまいましたよ。あなた達がいらないから、あわてておいかけたとか。観音堂の坂を上がっていくところ

で、追いついたそう。そんなに幼稚園、いや？ お家がいいの？

入園してから、半年は毎朝、園の入口で「帰ろうよ」といって泣きました。たいてい、竜平が泣いて、訓平は不安そうにまゆにしわをよせて、私にびったりくっついているといふ具合でした。先生が、ふたりを園に入れて門をガラガラと閉める、その音が刑務所の牢屋を連想させて、なんともいやな気分になりました。

そういえば、私自身も、母が三年保育に入れようとしたのを入園テストのときにきちがいのように泣き叫んで（それも二年続けて）結局一年保育になったという経歴の持ち主です。私の母は、そんなにいやがるのなら、来年にしようとか、私の行きたくない気持ち優先して、入園を延ばしてくれました。

しかし、ふたりの場合は、そうはいきません。引越してきたばかりでお友達はいない、幼稚園に行かなければ、昼間公園に行っても同年齢の子ども達はいない、午

後行っても園単位のグループで遊んでいる中に、ぼんと入ることはできない……いわば、幼稚園は、友達づくりのパスポートみたいなものだったからです。それに、中に入ってしまったえば、楽しく過ごすだろうという気持ちもありました。

ところが、ふたりはなんか、不満気、ふくれっ面でてくる人が多いのです。そこで園の様子を先生に伺ってみましたところ、「元気でやっていますよ」とのこと。ただ、他の子が積み木やレゴで遊んでいると、いきなり壊したり、ふたりでけんかしたりと台風の目になっているようでした。ふたりのクラスは十六人。そのほとんどが、年少クラスからあがつたり地域の幼児教室で一緒だったというように顔見知りでした。ですから、遊ぶにしても自然にグループができてしまうわけで、ふたりはそこに入れないようでした。

「入りたい、でも入れない」このジレンマが破壊行為に姿をかえて爆発してしまったのでしょう。私は、しばらく、様子を見ることにしました。

● 四歳六か月

今日、お迎えの時、先生によばれました。七夕の劇の練習をまるでないそうね。となりの用具の部屋で、かくれんぼをしているんですってね。先生が迎えにいくと、見つけてくれるまでかくれているそうですね。

キャッキャッいって、ひとしきり遊ぶと

「せんせい、もう、あっちいっていいよ」

「みんなとところへ いっていいよ」

というそうですね。う——ん……。

先生は「もう仕方ないんですよ」と笑いながらいってくださったから、私も少しは安心したのだけど。困ったもんだ。家に帰ってからききました。

「訓平、どうして、劇の練習しないの？」

「だって、せんせいが、やれっていうことやって、いっていいこというの、つまんないだもん」

「竜平、うたうのすぎでしょう。どうしてうたわないの」

「みんな、せんせいがうたえていったもんうたうんだよ。つまんない」

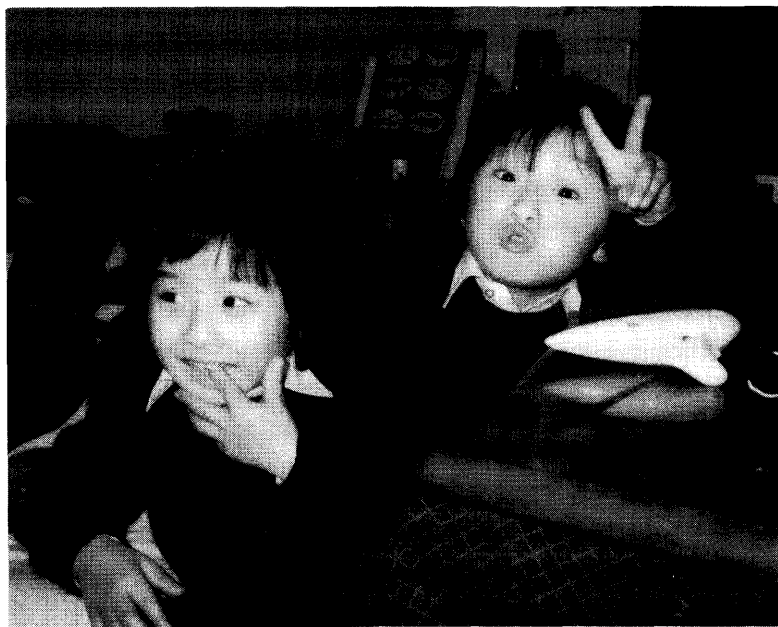
もう、やっぱり困ったもんだ。

結局、七夕会の舞台の上で、ふたりは棒立ちのままなんにもしないで、ぼ——っ。

園では、先生の「しまししょう」という言葉かけには従わず、好き勝手なことをして遊んでいたようです。

今、自分のしたいこと、自分のつもりがつよくて、先生が「しまししょう」ということと、そのつもりが一致しないと頑として従わなかったようです。さいわい、担任の先生がゆったりした方で、ふたりを強引に保育の流れにひきこんだりということはなさらず、見えるところから声をかけて興味をつなぐようにしてくださっていたようです。「困った子」「集団活動を乱す子」というレッテルを貼らず、大きい目で見ていてくださったことをとても有難いと思います。

はじめて入った集団活動の場で、一番身近な先生としてこのような方に出会えたことは、ふたりにとってとても重要なことだったと思います。



◀ ピースサイン・竜平、口の中に手・訓平（五歳）

秋になると、ふたりもすっかり友達の前で泣くこともなくなりました。

●五歳一か月

今日も、先生とけんかをしたといいます。真っ赤な目をして、ブンブンおこりながら園からでてきました。なにが原因かはしらないけれど、先生とこんな風に対立するのはよくないね。

年長になると、だいぶ園の生活にも余裕がでてきたようです。訓平は、お誕生日会するとき、舞台の上で「大きくなったら なになにになりたいですか」ときかれて「ぶたになりたいです」と答えるほど、度胸がついてきました。竜平は、新しい先生が、てきぱきしていて勝手は許しませんよ、という方だったので、だいぶ、ぶつかることが多かったようです。よく、トイレにたたされたり、部屋の外に出されたりしていました。訓平は、竜平の様子をハラハラしながら見ていたようです。家に帰るとす

ぐ、「今日、竜がね……と、まわらぬ舌で一生懸命、竜平の悪行の数々を報告します。竜平が叱られたり、反抗したりする様子を、緊張してじっと見ていたのだということがわかります。降園後、あまりよそに遊びに行くこともなく、家にいることが多かったのも、園での緊張で疲れ果ててしまったのかもしれませんが。竜平は、もうさっぱりとしてお友達の家遊びにいつているというのに。

すぐ、わあわあ大騒ぎして大人を煩わせる竜平は、あちこちぶつかりあいながらも、のびのび過ごしました。訓平は、竜平にハラハラ、ドキドキしながら、ちょっと緊張して過ごしました。

竜平が五歳の時、一か月入院しました。訓平は夜になると「竜が死んじゃうー」と言って泣きました。面会は子どもはできないので、お留守番をしているように言ってもききません。結局、小児病棟の入口で、一人でずっと待っていました。（看護婦さんに竜平とまちがえられ

て「なんでこんなところでてるの!」とどなられたりしました(が)

訓平は、一生懸命竜平のことを心配しているのに、竜平はまるでわかっていないようでした。

友だちとふたり

●四歳九か月

竜平、本当にあなたはわがままですね。とんかちは二本しかないの。ちゃんとじゃんけん、順番きめたでしょ。訓平とけんちゃんが先に使うことになったのに、竜平はわあわあぐずって、大変な騒ぎ。

「どうして自分の家なのにぼくがあとなの」って。そして、「やってみせてあげるから」と言って、けんちゃんがやってるところに手出しをする。もうっ。

*

●四歳十か月

砂場で、先が三つに割れている熊手のようなものがありました。訓平がそれを使おうとすると、訓平とたいして年の違

わない子が、先にとってしまいました。訓平、一言。

「これはね、こどもがつかうもんじゃないの」ですって。はつきりいって、訓平、あなたも子どもです。

お友達とよく約束するのは、竜平。訓平はどちらかというと家にきてもらって遊ぶ方がでかけていくよりも多かったようです。お友達が家にくると、ふたりはそれぞれに身勝手に、すぐに場をしきりたがる傾向がありました。外へ行くときは「はい、並んで」といって、全員を並ばせ、二列で行進しながら公園へいったり、「訓平の組」「竜平の組」といってふたつにこれまた勝手にわけたり。園では、「ししましょう」に従わないというのに家ではすっかり「先生」になってしまふのです。そんな遊び方を見ると、いつかこのふたり、友達からボーイコットされるのではないかと親の方が心配になってきました。

お友達がくると、私も、一緒に遊びました。小麦粉粘土を作ったり、家中の毛布といすでお家を作ったり。そ

それはそれで、とても楽しかったのですが、結局、私が子どもの中に入って双子のわがままにブレーキをかけ、子ども同士の関係を調整してしまっていたようです。わがまま言っていると、友達がいなくなるよということを自分の心でじんわり知ることが必要だったのです。訓平は訓平のやり方で、竜平は竜平のやり方で、ストレートに友達と関わって、その結果がうまくいかなかったら、はたと考えて関わり方をかえてみる、そうやって人と人のつき合い方を学んでいくのが本当だったと、今になって思います。反省。

ひとりひとり

●四歳八か月

訓平はすごい。もう三日、自転車の補助をとって乗る練習をしています。何度倒れたか。足から血がでてる。ひじも。でも、あきらめない。ギーコ、ギーコ、パターン！

がんばれ。竜平は二階から、訓平の様子を見ているだけ。

竜平、いいの？

*

●四歳八か月

やっとすいすい乗れるようになりました。訓平!! やったね。

竜平が、やっと自転車に乗って練習をはじめました。何度か、ギーコ、ギーコやって……でも、一回もころばずに……の・れ・て・し・ま・っ・た!!

ああ、訓平は一週間かかったのに。

何をやるのでも、訓平より竜平の方がはやい。しゃべるのも、おもちゃをとるのも、食べ物をとるのも、私の膝にのるのも…。

補助なし自転車に乗れるようになるのも。

訓平、血を流して一週間、竜平、無血で数時間。

努力する、がんばる、ということとはとても大事です。

わりと器用になんでもこなす竜平より、無器用ながらも、がんばってものにする訓平の方が、先に行って楽なのではないかと思いますが、どっちにしろ、ふたりとも

◀ 手前が訓平、奥が竜平、補助付自転車で（三歳）



素敵な人生を歩んでいってほしいものです。

訓平と竜平は、同時にうまれてきて同じ環境で育っても、ひとりとひとり。ふたりの違いは差ではなく、個性です。私は双子を育ててみて、改めて「十人十色」という言葉を思いました。人間、そもそもみんな違って当たり前。違いを削って同じにするのではなく、違いを膨らませてまあるくなれたらいいなあ……。ますます、違ってきたふたりをみながらそう、思います。

（作家・ツインマザーズ所属）

に お い の 記 憶

松 井 と し



りんごの出回る頃になると思い出すことがある。まだ私が幼稚園に入る前のことなのだが、ある日、私は心臓病で入院中の伯母の見舞いに連れて行かれた。お茶の水の順天堂医院の廊下には、左側から西日が差し込み、ゆったりした曲が流れていた。今でも覚えていゐるそのメロディーは、当時のラジオの健康番組のテーマ曲であつたらしい。右側に並ぶ病室のドアを開けると、そこは暗く異様なにおいが鼻をついた。

付き添いの人だったのだろうか、見知らぬ人がりんごをむいてくれたのだが、私にはどうしても食べられなかった。熟したりんごの甘酸っぱい香りと、室内に漂う病院特有の薬くさいにおいが入り混じって、私は最後まで首を振り続けたのだった。

一番年下の妹の子である私をたいそうかわいがってくれたというその伯母は、その後は

どなく五十歳そこその生涯を終えたのだが、あの時、子どもらしく喜んで、出されたりんごを食べることができたら、病人も嬉しかったろうにと、今もなお、胸のいたみとともにその時の情景を思い出す。

においを伴った記憶は、なんと驚くほど鮮明に蘇るものであろうか。

幼い子どもは感覚が鋭く、驚かされることがある。しかし、最近では、子どもたちを取りまくにおいては人工的なものはらんし過ぎている。お菓子やジュース類にはフルーツの、子ども用の模様入りのティッシュペーパーにはクッキーのにおいが付け込められている。きんもくせいやバラの花の香りをトイレの芳香剤のにおいだと思っている子どもも増えていると聞く。

この夏、幼稚園のテラスで、水耕栽培のミニトマトを育てた。鈴なりになる黄色のトマトを収穫すると、スンとおいがした。「これが畑のトマトのにおいよ」と言いながら、私自身久しぶりの懐かしい思いでこのにおいをかいだ。

温室の人工照明で育てられたトマトにはこのにおいが無い。

(神奈川県立教育センター)

ジョン・バーニンガムの魅力 3

『バラライカねずみのトラブロフ』と

『たいほうだまシンプ』を中心として

高原 典子

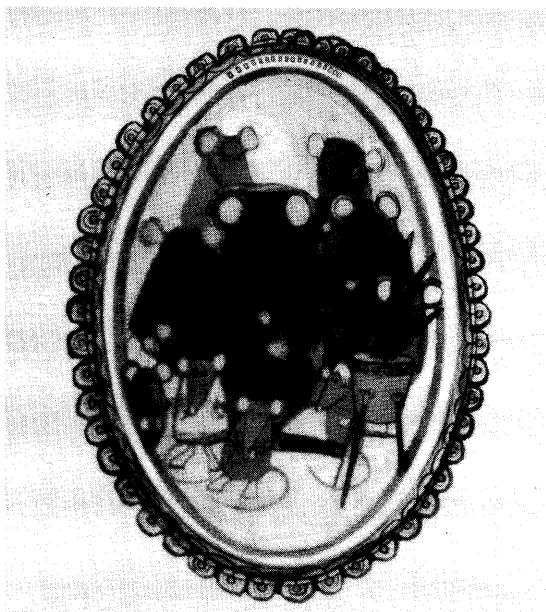


○ 不分明な主人公

『バラライカねずみのトラブロフ』の第一ページは、ねずみのトラブ一家の肖像画(図版①)とともに始まります。ここには九匹の大家族が描かれていますが、不思議なことに主人公のトラブロフがどのねずみなのかはつきりしません。文の方も「このなかに、トラブロフがいます」と読者の想像に任せる形となっています。私はたぶん前列の中央、または左端のねずみがトラブロフだろうと思いますが、後のページを繰って第一場面の主人公を推理するのはなかなか楽しいことであると同時に、主人公がそれらしい特徴を持っていないことに、心なしか不安が残ってしまいます。でも、それだからこそ主人公は、やがて家族から離れて旅に出なければならなくなるのでしょう。あるいは作者の内にはどの子ねず

◀ 図版① 『バラライカねずみのトラブロフ』

(ほるぶ出版)より



「絵本」という媒体の特色を心にくいほど知っていて、読者に楽しいなぞかけをしたような気がします。

○夢中になること

トラブロフはヨーロッパのなかほどにある宿屋で生まれ、酒場の台のはめ板の後ろに住んでいました。そこには夜ごと、ジブシーの楽士たちがやって来て演奏し、生活の糧を得ていましたが、彼はそのバラライカの音色に魅せられてしまうのです。寢床に帰るのも忘れて音楽に聞きほれるほどです。

みも「トラブロフ」の可能性を持っているのだという思いがあるのかもしれませんが、いずれにしても、バーニングは、読み手のペースに合わせて主人公捜しのできる

すると事情を知った大工のじいさんねずみがバラライカを作ってくれることになりました。それができ上がるまで待つ時間の長いこといったら！ 国一番のバラライカの名手になって、聴衆からわれんばかりの拍手を浴びる夢を見たほどです。希望や将来の夢のような観念的なものを絵本で表現するのは、なかなかむずかしいことですが、この作品では、トラブロフがどれほどバラライカに夢中になったかが、場面を追ってたたみかけるよう

に視覚化されていますので、若い読者にもよく伝わると思います。

さて、念願のバラライカを手に入れるまでは周囲の力添えがありました。その先はトラブロフ自身の問題になります。そして彼の決意のほどを問われる機会は、まもなくやってきます。バラライカの師となるジブシーの楽士たちが旅立つことになったのです。それを知ったトラブロフは、両親の反対をおそれ、だれにも告げずにジブシーのそりにこっそり乗りこんで出かけます。

何かに夢中になるということは、その対象にのめりこんでまわりが見えなくなる状態ですが、家庭の中で工作などに夢中になるとちがって、家を離れてまで何かを追いかけていくとなると、まず家族のもとから離れられる段階に達しているということになります。

これは、アーディゾーニの「チムとゆうかんねせんちようさん」のチムの旅立ちなどにも言えるでしょう。

海岸の家に住むチムは、船乗りになりたくてたまりませんでしたが、両親からおとなになるまで待つように言

われ、がっかりしていました。ところが、ある日、汽船を見に行く機会がおとずれたのをいいことに、密航をはかるのです。

こうして船に、バラライカにと夢中になった主人公たちは、家を遠く離れ、旅の生活に入ることになります。

○さすらい

ところで、これらの旅は、ただ楽器の技術をマスター



▶ 図版② 『バラライカねずみのトラブロフ』より

したり、船乗りとしての経験を積むというだけの意味を持っているわけではありません。心理的な発達のレベルから捉えれば、自分らしさを確立する自己確立と、自己実現のプロセスともいえます。

人は生まれたときから、その人なりの独自性を持っています。それが最初からきわだっているとは限りません。肖像画の中のトラブロフのように、主人公とはわからないほどまわりと融合してしまつて、まだアイデンティファイされていない場合があります。自己確立されて初めて、バラライカを持ったり、(図版②) スキーをはくねずみとして個性的に描かれるようになるのです。

そのプロセスでは、トラブロフもチムも家族からひとり離れています。そばには頼りになる旅人としてのジプシーの楽士や、勇かな船長がいます。どうやら、家族に代わる家族以外の良き同伴者が、非常に大きな役割を果たしているといえそうです。憧れや理想のモデルを得ることが、自己確立を促すわけです。その原動力となるのはやはり「夢中になること」でしょう。



▲ 図版③ 『バラライカねずみのトラブロフ』より

親の立場を考えると、いくら何かに夢中になったからとはいえ、ある日突然、子どもがいなくなれば、トラブロフやチムの両親のように子どもの身を案じ、病気になるほど悲嘆にくれるのも当然のような気がします。でも、子どもの内面では、決して突然ではなく、着実に、自己確立への準備がなされていることが、彼らを見ているとよくわかります。

さて、旅立ったトラブロフと毎日を共にするジブシーたちの生活は、宿屋から宿屋へとまわり歩き、歌い、踊り、納屋で寝とまりするというものでした。その表情は、いつも目を閉じ、流浪の民としての運命を甘受する深い憂愁にいろどられています。(図版③)そして彼らの旅は果てしなく続くのです。こうした、旅をすみかとするジブシーや船乗りの「さすらい」が、自己確立の風景として象徴的に描かれています。

○もうひとつのさすらい

バーニンガムの作品には、別の意味でさすらい主人公

もいます。かつては捨て犬だった彼の愛犬アクトンを主人公にした『たいほうだまシンプ』です。だれが見てもみっともない小犬のシンプは、飼主にやむなくゴミ捨て場のそばに捨てられています。ねずみに邪魔にされ、どらねこに追いかけられた挙句、野犬がりの車に放り込まれます。でも、他の犬と違って迎えに来てくれる飼主のいないシンプは、生命の危険を感じて逃げだし、さまよい歩いた末、サーカスのほろ馬車に近づくのです。そこには親切なピエロがいて、空腹のシンプにたっぷり食べものをくれ、ぐっすり眠らせてくれました。

ところが、このピエロも、おもしろい出しものが創りだせなかったら、サーカスを追われるという窮地に陥っていました。そこでシンプは知恵をしぼり、自分が大砲の玉となってピエロの持つわかを破るという芸を考え出し、ピエロを救います。こうして、二人はサーカスの花形となり、シンプはピエロと一緒に旅してしあわせに暮らすのです。

二人の芸が拍手を受ける場面は輝かしく、諦観的なジ

◀ 図版④ 『たいほうだまシンプ』

(ほるぶ出版) より



ブシーの表情と好対照をなしています。(図版④) 協力の成果が得られたことだけでなく、家族ともいえる親友に出会えたことが、彼らをこんなにも喜ばせているのです。家族のないシンプにとって、「さすらい」とは家族を見つけるプロセスだったともいえます。これからサーカスの旅は続きますが、二人の絆は何にもまさるも

のとなるでしょう。

最後の場面では、『ガンビーさんのふなあそび』にも登場した「このうえもなく安定した緑色」の夜が、サーカス列車をすっぽりと包みこみ、しあわせそうなシンプとピエロを印象づけています。

○トラブロフの帰宅

さて、旅を続けていたトラブロフにも、やがて帰郷する日が訪れます。おかあさんの病気が重いからと妹が迎えに来たからです。二人は雪の中を野宿しながら、何日もかかって帰りますが、このときの耐えがたいほどの寒さは、黙って家を出たトラブロフを心配する親の心境にひとしいものでしょう。

彼の無事な姿を見て、両親はもちろん喜びます。そして今度は、そのバラライカの演奏によって、家を追われそうだった家族が救われるのです。グリムの昔話『ヘンゼルとグレーテル』では、二人が魔女の家から持ち帰った宝物によって、父子三人がしあわせになります。ト

ラブ一家の場合も、トラブロフの自己確立がその宝物にひとしい意味を持つわけなのです。

トラブロフにとっても、「さすらい」は、自己確立だけでなく、新たに家族の意味を見いだす機会となったといえるでしょう。



子ども、そして人間の成長には象徴としての「旅」が欠かせません。バーニンガムはこの二冊で、ねずみ、捨て犬など社会の底辺に生きる主人公とジブシーやピエロという旅芸人を出会わせ、「さすらい」の光と影を描き出しました。そこでは、常に新しい自己を見つけて磨き、それを生活の糧としなければ生きていけないせっぱつまった状況が展開されます。その緊迫を分け合う仲間だからこそ、そこから生まれる人と人、家族との絆には類まれな強さと深みがあるのでしょう。

これら二冊は、彼の作品の中でも長編といえるものですが、そのまなざしの鋭さと温かさ、表現力の自在さが、隅々にまで感じられます。

○おわりに

絵本を読み聞かせてもらうことは、いくつになっても楽しいことに違いありません。秘書を志すコースの学生たちに絵本の授業を持ったとき、「絵本を読んでもらって楽しかった。私は保母さんや幼稚園の先生になるわけではないが、もし自分の子どもが生まれたら、是非、読んであげたいと思う」という感想を頂き、絵本の魅力を再確認しました。それだけでなく、子どもに読んであげたい、感動を分かち合いたいというみずみずしい感受性もだいたいのものと思いました。

絵本の場合、文章の長さからいうと比較的読み聞かせしやすく、聞き手にとっても、読み聞かせてもらって初めてわかる面白さがあります。それに、何といっても読者を特定しない良さが、ジム・トレリスをして「絵本は小学生から高校までのすべてのクラスの読み聞かせリストに加えるべきである*」といわしめた所以でしょう。彼は大人の講演会にも絵本を入れるといいます。私も絵本を読むにつけ、絵本は子ども、そして今、子ども

のそばに在る方だけのものではなく、あらゆる方の、とりわけ、これから育児にかかわるかもしれないさまざまな方のものであってほしいと思います。

六回にわたって「絵本の世界」を読んでくださってありがとうございました。

これらの作品論を書くにあたって、清水いく子著「バージニア・リー・バートン論序論」（同人誌『舞々』2号所収）、瀬田貞二『絵本論』（福音館書店）、中村柁子『子どもの成長と絵本』（大和書房）、長谷川摂子『子どもたちと絵本』（福音館書店）、本田和子『子どもたちのいる宇宙』（三省堂選書）、松井るり子『こたこた絵本箱』（学陽書房）、松岡享子『えほんのせかいこどものせかい』（日本エディタースクール出版部）、森下みさ子『安野光雅のAB・C』（同人誌『舞々』3号所収）、吉田新一『絵本の魅力』（日本エディタースクール出版部）、日本児童文学別冊『世界の絵本100選』『日本の絵本100選』（偕成社）などから多くの示唆をいただきました。

掲出図書

○ジョン・バーニングムさく／せたていじ訳

『バラライカねずみのトラブロッ』（ほるぶ出版・絶版）

○ジョン・バーニングムさく／おおかわひろこ訳

『たいほうだまシンブ』（ほるぶ出版）

○エドワード・アーディゾーニさく／瀬田貞二やく

『チムとゆうかなせんちょうさん』（福音館書店）

引用文献

*ジム・トレリース著・亀井よし子訳

『読み聞かせ——このすばらしい世界』（高文研）

（小田原女子短期大学非常勤講師）

※「絵本の世界」は今月で終わります。高原先生、一年間、楽しい絵本論をありがとうございました。（編集部）

*** ある日の育児日記から ***

***** (12)

佐藤 和代***



お腹の子は四か月になりました。まだつわりがおさまらず、暇な時間が少しでもあれば、横になりたいと思っています。その分、圭はあまりかまってももらえなくて、少々欲求不満のようです。しきりにだっこを求めたり、好き嫌いがはげしくなったり。

圭は、お腹の赤ちゃんのことをどう思っているのでしょうか。突然、だっこもダメ、公園もダメで寝てばかりいるお母さん。それがみんな「赤ちゃんがいるから」なのです。じゃまものだと思われるて当然のような気がします。

あるとき、圭が私のお腹にさわっていたので、言ってみました。「赤ちゃんがね、圭のことが好きだって」圭は両手でそっとお腹をなでて、「にっこりしてる?」とききました。「どうかな、どれどれ...あ、にっこりしてる。」圭は私の顔を見てほわっと笑い、お腹にはおずりました。

こんな優しいひとときがあると、つわりのことも忘れて、妊娠っていいなと思っています。

圭にとっては、不満なこと多いでしょう。今はただ、おねえちゃんになるってすてきよ、きつと楽しいことが待ってるよ、と、機会あるごとに語りかけていこうと思います。



ふふしきマントのアシパンマン
何だか 昔なつかしいぞ。

いのだと娘は泣く。

お上（先生）の言うことは絶対で、必死になって守る。守らないやつがいたら「非国民！」呼ばわりしてみんなでいじめる。自分たちと違うことをするやつは許さない。戦争に役に立たない（勉強ができない）人はバカにされ、さげすまれる。

「学校は軍隊と同じだ」田口恒夫先生がいつもおっしゃってた言葉を思い出す。

学校に行きたがらなくなった娘について私も学校に行ってみた。朝礼のアナウンスを聞いて驚いた。過番（？）の先生がおっしゃる。

「連絡します。明日から手袋をはめてよいことにします」

なんなんだ!? 手袋をはめるかどうかも自分で判断できない子どもを育てているのか？ 日本の学校は!?

休み時間、娘がTちゃんとけんかをする。けんか、おおいにやれ。私は教室の後ろで本を読むふ

りをしている。言葉がするする出ない娘はTちゃんをたたこうとする。からかいながら逃げるTちゃんを、娘は大声でわめきながら追いかける。教室に入ってきたクラスの女の子たちが口々に娘



を注意する。「あきちゃん！ また大声出して！」「教室であばれちゃダメっていつも言ってるでしょ！」「もう！ あきちゃんは！！ お友達をたたいてちゃだめでしょ！」理由も聞かずに、一方的に、頭ごなしに。

「なんなのヨ！ この学校は！！ みんなしてあきちゃんをバカにして！」

家に帰った私は怒り狂った。娘はぼったりと学校に行かなくなった。三年生の十二月だった。

生後八か月で脳腫瘍の手術を受けた娘は発達が遅れた。ひとりでも何とか少し歩けるようになったのが小学校一年生の終わり。学校の勉強にはついていけない。発音が不明瞭で言葉が聞き取りにくい。

だけど、二年生までは娘は喜んで学校に通っていた。九州・福岡県の筑後市という所に住んでいた。「歩けないのに、あんなに一生懸命で。こけ

ても泣かないし。ぼくなんかとてもまねできないよ。あきちゃんはすごい！ とにかくすごい！」みんなから一目置かれていた。制服もない。のびのびした学校だった。

三年生の四月にここ兵庫県に引っ越して来た。七か月間もよく通ったと思う。制服だって着た。宿題だってしようとしていた。

娘は四年生になった。四年生になってからまだ一日も学校に行っていない。

「お宅のお子さんの小学校が決まりましたのでお知らせします。S養護学校です」

「いいえ。私たちは校区の小学校にやりたいと考えています」

三回の教育委員会との話し合いの結果、校区の小学校の普通学級に入学できることになった。でもその時から、いつかこの娘は学校には行かなくなるかもしれないと考えてきた。学校なんか行か

なくてもいい。勉強なんかできなくていい。行きたくなくなったらいつでもやめると言ってきた。

でも本当に学校に行かなくなって娘は大変だった。他にやりたいことがあって学校をやめたわけじゃない。娘はお友達が好きだ。お友達と遊ぶのが一番好きなことなのだ。「学校に行かん子とは遊ばん！」近所の子もしだいに遊びに来なくなる。

「あきはひまー！ 何したらいいの!」

娘は一日中わめいた。「ひまなら手伝って」「イヤ」「散歩に行こうか」「イヤ」「買い物に行こうか」「イヤ」「じゃ、お留守番してて」「イヤ」

外に出るのをいやがった。庭に出るのもいやがった。おもちゃ買えとわめき、お友達や猫が思い通りに動かないと言って泣き叫んだ。机に向かっていても、洗濯物を干していても、トイレに入っても「ママー！ ママー！」娘のヒステリックな呼び声に私はどうかかなりそうだった。

それでもなるべくつき合って遊んだ。おもしろそうな絵本や漫画、迷路の本を借りたり買ったりしてきた。絵本は見向きもしなかった。朝起きると「きょうも一日、あきちゃんのぐずりにつき合わなくちゃいけないのか」ため息が出た。

サラリーマンを辞めてお坊さんになった夫が言った。

「犠牲になるな。無理してつき合うな。道子が今、自分を犠牲にしてあきとつき合えば、いつかあきも誰かのために自分を犠牲にする日が来るだろう」

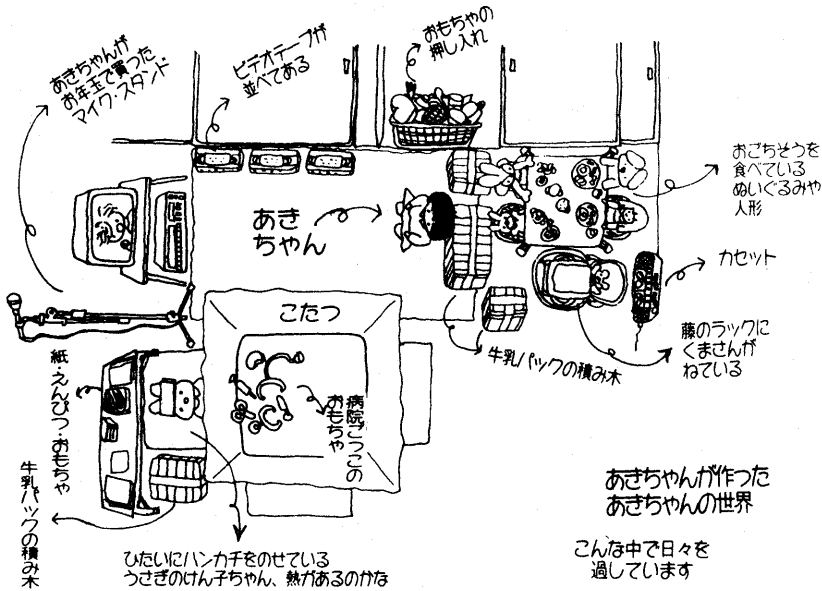
そうだ。私たちは娘に望んでいる。誰かのために無理したり自分を犠牲にしたりするのはなく、自分のやりたいことをする人生を送って欲しいと。そして、娘の人生が娘のものであるように私の人生も私のものなのだ。つい忘れてしまう。

遊んだりケンカしたりしていたが、ある日疲れに疲れて私は爆発した。もうこの子につき合うの

はいやだ。もうやめた。私が放り出すことで、この子が気が狂おうが、首をくくって死のうが、もう私は知らない。知るもんか。

「ママは遊ばない」私は宣言した。娘は泣いたりわめいたりしていたが、「いいよ、いいよ」とすねて二階へ上がって行った。

十二月に登校拒否を始め、翌三月には娘はすっかり落ち着いた。学校に行っていた頃よりもずっと穏やかになった。ビデオのまわりに牛乳パックで作った積み木・小さな机・椅子・ざぶとん・ぬいぐるみ・人形などを並べて自分の世界を作り始めた。ビデオを見ながら何やらしたり書いたりしているらしい。テレビやビデオを見ながら遊ぶ「ながら族」は私は大嫌い。口うるさく言ってケンカもしたがあきらめた。娘の人生は娘のもの。ビデオ漬けの人生もまたよいのかもしれない。夢中になれることが見つければ、いつかビデオを消す日が来るかもしれない。とりあえず今、娘はこ



▲ 常陽新聞連載「あきちゃんは四年生」より

うしたいのだからこれでいいや、とやつと思えるようになった。

十時、十二時、三時に「おやつ!」「ごはん!」と叫ぶ以外、昼間、娘はほとんどひとりで時間を過ごしている。私は日がな一日、お寺（お寺に住んでいる）の庭の草むしりにはげんでいる。自分のペースで仕事ができるようになって私はとても楽になった。

「九歳の危機」という言葉があると友人が教えてくれた。まさに娘は九歳である。九歳は親離れの大切な一時期なのだとも聞いた。

でも、いくら「九歳の危機」でも、「この子が首をくくって死んでも私は知らん!」なんて大げさな子離れを普通の親はしないのだからなあと思う。私たちは母娘ともに過激な性格だ。そして娘が登校拒否を起こしたので、私たち母娘は「九歳の危機」をもろにぶつかり合わなくちゃならな

かったような気がする。

ひとりでよく歩けなかったり、娘はひとりでできないことがたくさんある。その分私たち母娘はどうしても密着してしまう。だから親離れ、子離れはよけい大変な作業であるようだ。

これから先、お互いに独立するために、いったいくつの「危機」を通り越すのだろうか。今さらこの過激な性格は直らない。なるべく肩の力を抜いて、せいぜい、どなり合い、わめき合い、泣いたり笑ったりして、楽しい日々を暮らすとしましょうか。

（はるにれの会）

幼児の教育 第九十卷 (平成三年) 総目録

㊦三号

△巻頭言／教育の問題を考える

牛島 義友

韓国幼児教育学会における講演 (二)

津守 真

幼児保護と教育の政策

守永 英子

思い出の中の保育 (2)

特集△風△

こわーい風の話

季節の風

塚本 治弘

音楽の風

柴田 文子

風に乗った五月とメイ

山内えりか

風を踊る方法

皆川美恵子

風を知る ヨットにのって

多田 慶子

北の国で風になる

谷 直樹

保育者養成の今日的課題 (2)

上原那奈世

チーム観察法の開発

前田あけみ

保育にあたって思うこと

岩上 節子

園庭より (10) ハンカチ

松井 とし

ある日の育児日記から (3)

佐藤 和代

ヨーロッパ絵画にみる幼児発見の系譜と

その背景 (4)

藤田 博子

なりきる

古岡 晶子

ある日の育児日記から (1)

佐藤 和代

若いお母さんたちへ

豊田 一秀

㊦一号

写真・子供讃歌

△巻頭言／環境を通しての教育

河野 重男

過去をひきずりながら前進する人間

保育のひとつまで考える 津守 真

保育研究のあり方をめぐって 無藤 隆

保育者養成の今日的課題 (1)

少子化傾向を中心として 前田あけみ

思い出の中の保育 (1)

守永 英子

園庭より (9) 料理

松井 とし

子育てと保育

新山 裕之

ヨーロッパ絵画にみる幼児発見の系譜と

その背景 (3)

藤田 博子

なりきる

古岡 晶子

ある日の育児日記から (1)

佐藤 和代

若いお母さんたちへ

佐藤 和代

㊦二号

△巻頭言／幼児に信頼される保育者

韓国幼児教育学会における講演 (一)

幼児保護と教育の政策 津守 真

よし藤・子ども浮世絵に見る児童観

よし藤・子ども浮世絵に見る児童観

絵本の世界 (1) 『わすれられないおくりもの』をめぐって

ある日の育児日記から (2)

チェコ便り (7)

ブラハの冬のくらし

言語障害の臨床研究ノート (6) 終章

国際化のうねりの中で

心が育つということ (5)

心か育つということ (5)

心か育つということ (5)

子どもたちと共に

川上 美子

岡田 正章

津守 真

中村 光夫

高原 典子

佐藤 和代

大梶 優子

終章

村上 敏子

豊田 一秀

村上 敏子

豊田 一秀

村上 敏子

豊田 一秀

村上 敏子

豊田 一秀

写真・子供讃歌

△巻頭言△外国の幼児教育施設の名称

岩崎 次男

子どもの側に立つひとつの決断 津守真
遊びを通して育まれる自律性 内田伸子

附属幼稚園の教育(1) 四月 村石 京

保育学事始め

松沢 孝博

故国を後にして(1) 手の中にどんぐりと

いふ故国

モーレンカンブふゆこ

ある日の育児日記から(4)

佐藤 和代

遊びの流れを追って

田中三保子

絵本の世界(2) 『たんじょうび』を

めぐって

高原 典子

若いお母さんたちへ いろんな子

んなかわり

野島 順子

△五号

写真・子供讃歌

△巻頭言△創造性を培う

藤田 復生

積み重ねられた日々の中で考える Sく

んが十七歳になったいま

津守 真

子育てをめぐる夫婦トークキング

鈴木 洋・鈴木みゆき

附属幼稚園の教育(2) 五月 村石 京

幼児虐待を考える(1) メディアとしての

「幼児虐待」

K・M・H

園庭より(11) 温泉

松井 とし

家庭での生活から

伊集院理子

保育園での個人用おもちゃ

山口 陽子

保育者養成の今日的課題(3)

チーム観察法の開発

ある日の育児日記から(5)

前田あけみ

若いお母さんたちへ

佐藤 和代

逆子がくれたもの

河合 聡子

こと

清水 光子

△六号 △巻頭言△保育の中の「環境」という

こと

手放すことについて

成長の後再度考える

津守 真

特集△腐る△

「腐る」ということのプラス面 相田浩

くされ縁

平田 道子

堆肥が作る自然菜園

徳野 雅仁

ぎんなんとモルモット

島村 和子

附属幼稚園の教育(3)

村石 京

チェコ便り(8) J・A・コメンスキー

T・G・マサリクの講演から(1)

園庭より(12) 電話 大槻 優子

故国を後にして(2) 良き歌のために

松井 とし

ある日の育児日記から(6)

モーレンカンブふゆこ

絵本の世界(3)

『ぐりとぐら』をめぐる

若いお母さんたちへ

高橋 典子

たんぼぼの会

渡部みさ子

新しい生活に向かって

ある子どもの卒業と入学

幼児虐待を考える(2)

津守 真

児童虐待―その背景―

池田 由子

附属幼稚園の教育(4)

発達のとらえ方とそれをふまえた指導

のあり方について1

村石 京

保育者養成の今日的課題(4)

心理劇の活用1

前田あけみ

思い出の中の保育(3) 守永 英子
 故国を後にして(3) ひっそりと死にゆくもの モーレンカンフふゆこ
 三歳児とともに 桜林 早苗
 園庭より(13) 遠慮 松井 とし
 小動物玩具を保育の中でいきいきとしたしく活用した実践報告 鈴木みゑ子
 ある日の育児日記から(7) 佐藤 和代
 若いお母さんたちへ 杉本 裕子
 長男の幼稚園入園前

写真・子供讃歌

八号

へ巻頭言▽「子どものあとについていく保育」とは? 黒田 成子
 朝の集まりがなくなるまで 津守 真
 附属幼稚園の教育(5)
 発達のとらえ方とそれをふまえた指導のあり方について2 村石 京
 緑蔭図書紹介
 親って何だろう・他 中村 妙子
 症状としての学校言説・他 無藤 隆
 食べること思想 森下みさ子

ベルリンの幼年時代 彌永 信美
 人生に必要な智慧はすべて幼稚園の砂場で学んだ 田代 和美
 静かな生活 中村 弓子
 たのしくたのしく絵を描こう 林健造
 あかちゃんの本箱 永田 桂子
 絵本の世界(4)ジョン・バーニンガムの魅力1 高原 典子
 ある日の育児日記から(8) 佐藤 和代
 若いお母さんたちへ 祐子三歳
 独立のイメージ 小園江幸子

九号

へ巻頭言▽二人の「みなしこ」 三木紀人
 保育者が生命的になるように 津守 真
 幼児虐待を考える(3) 電話相談「子ども虐待ホットライン」 平田 佳子
 附属幼稚園の教育(6)
 二期期の保育 村石 京
 テレビゲーム 山本 政人
 チェコ便り(9) J・A・コメンスキー
 T・G・マサリクの講演から(2) 大槻 優子

ひとりひとり 一卵性双生児子育て記
 0歳〜3歳 須藤 麻江
 思い出の中の保育(4) 守永 英子
 保育者養成の今日的課題(5) 心理劇の活用2 前田あけみ
 ある日の育児日記から(9) 佐藤 和代
 若いお母さんたちへ 榎田二三子
 見えないものから育つ

十号

普通の日 津守 真
 アガツィ法とモンテッソーリ法 上野 慶子
 子どもの育ちに関する実践的研究 保育の中の「ゆれ」について 永倉みゆき
 附属幼稚園の教育(7) 行事について 村石 京
 幼児虐待を考える(4) こどもの物化としての「虐待」 土屋 明美
 幼稚園の建物と庭 田中都慈子
 チェコ便り(10) こどものうた 大槻優子
 ある日の育児日記から(10) 佐藤 和代
 園庭より(14) 水のある風景 松井 とし

故国を後にして(4) 子どもたちの詩

モーレンカンブふゆこ

絵本の世界(5) ジョン・バーニンガムの

魅力2 高原 典子

〇十一号

△巻頭言▽幼稚園と小学校の一貫性

秋山 和夫

状況の中で保育はなされる 津守 真

子どもから何をどのように学んだらよい

か 共に育つということ 藤田美美子

附属幼稚園の教育(8)

活動について 村石 京

「住まい」のイメージ

生活空間のドラマ 西村 一朗

子どもの夢の家 村松 明子

傘の家から 宮里 暁美

保育者養成の今日的課題(6)

動物実験の試み 前田あけみ

ある日の育児日記から(11)

若いお母さんたちへ

オランダ便り(2) 向山 陽子

〇十二号

△巻頭言▽子どもと死

真行寺 功

保育者の限界と実力

津守 真

わが国における現代の母子関係をめぐって

めぐる

山崖 俊子

附属幼稚園の教育(9)

指導計画について

村石 京

カレンダーづくりの楽しみ

湯沢 朱美

「かたつむり」の中のひとりひとりの

子どもたち

赤羽美代子

思い出の中の保育(5)

守永 英子

ひとりひとり 一卵性双生児子育て記

4歳と5歳

須藤 麻江

園庭より(15) においの記憶

松井 とし

絵本の世界(6) ジョン・バーニンガムの

魅力3

高原 典子

ある日の育児日記から(12)

佐藤 和代

若いお母さんたちへ

登校拒否と子離れ

庄籠 道子

第九十巻総目録

幼児の教育

第九十巻 第十二号

(一九九一年十二月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成三年十二月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五十一二二一

発売所

株式会社フレイベル館

東京都千代田区神田小川町三一

振替口座 東京九一一九六四〇

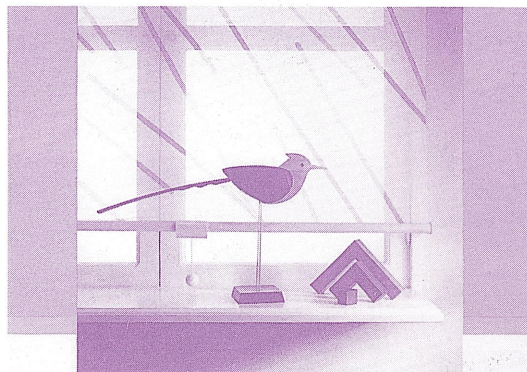
電話 〇三三三九二七七八

●本誌購読のご注文は、発売所フレイベル館にお願いいたします。

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

新しい保育の考え方やその展開方法の
具体的な実践レポート。

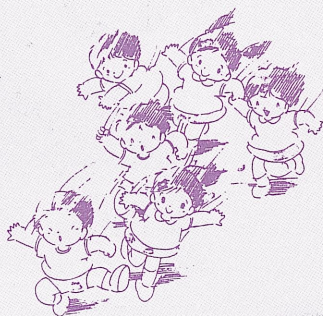
新しい保育を創造する保育者



新しい保育を 創造する保育者

網干正裕・小澤恒三郎・菊地明子／編著

幼稚園教育要領・保育
所保育指針の改訂の趣
旨を正しくとらえて保
育現場で混乱をさける
ための保育先導者によ
る具体的なレポート。
教育課程の編成、指導
計画の作成と展開など
保育現場での問題点が
掲載されていて保育の
見直しに活用できます。



網干正裕・小澤恒三郎・菊地明子・編著

A 5 判・240頁・定価2,000円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

エプロンがおはなしの舞台に変身!!

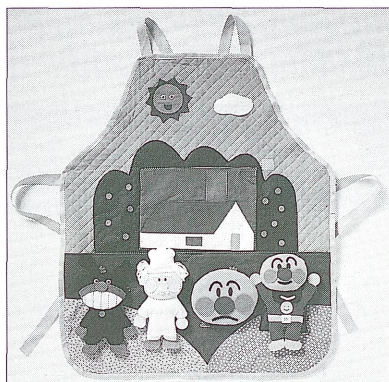
エプロンシアター

エプロンシアターは、エプロンがそのまま舞台になり、ポケットなどから人形が出てきてストーリーが展開していきます。人形の演技と、先生も演技することで子どもたちと一体となってお話ができ保育室が楽しい雰囲気につつまれます。

セット内容

- ① 夢いっぱいの楽しいお話3話
「アンパンマンとばいきんまん」
「赤ずきん」 「お誕生日おめでとう」
- ② 実演ビデオテープ(VHS)カラー20分
- ③ 台本

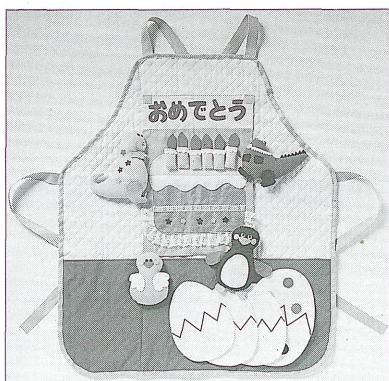
25,000円(税込)



「アンパンマンとばいきんまん」



「赤ずきん」



「お誕生日おめでとう」



くわしくはプレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
プレーベル館